

# 8th ESWI Influenza Conference 参加報告

(2021年12月4日～7日開催, オンライン)

高下恵美

国立感染症研究所インフルエンザ・呼吸器系ウイルス研究センター第一室主任研究官

第8回 European Scientific Working Group on Influenza (ESWI) Influenza Conferenceは2021年12月4～7日にバーチャルで開催された。ESWI Influenza Conference (<http://www.eswiconference.org>)は欧州最大規模のインフルエンザ会議で、科学者中心の Scientific programme (SCS) と Satellite sessions (SAT)に加えて科学を政策に反映させるための政策担当者中心の Science Policy Interface (SPI)のセッションがあるのが特徴である。2002年の第1回以来、欧州各地で3年ごとに開催されてきたが、2020年の前回は新型コロナウイルス感染症 (COVID-19)の世界的流行に伴い、完全バーチャル開催へと変更された。第8回は当初、オーストリアのザルツブルクでの現地開催とオンラインのハイブリッド開催が予定されていたが、COVID-19流行下における安全面を考慮し最終的に完全バーチャル開催に変更された。本会議では前回から引き続き、インフルエンザ、RSウイルス (RSV)感染症ならびにCOVID-19が主題とされ、40のセッションに120

の口頭発表があり、参加者は600名以上であった。

開会式ではDr. Kanta Subbarao (WHO Collaborating Center, Melbourne, Australia)からCOVID-19流行下における季節性インフルエンザの動向に関する講演「Influenza in the time of COVID-19」があった。WHOのグローバルサーベイランスでは、SARS-CoV-2の出現後、世界的に季節性インフルエンザの検出報告数が激減しており、特にB山形系統のウイルスは2020年初め以来、報告がない状況が続いている。COVID-19流行下で季節性インフルエンザの流行がみられないことは、海外からのウイルスの持ち込みや検疫、非医薬品介入 (non-pharmaceutical intervention : NPI)がウイルスの流行に重要な役割を果たしていることを示している。また、季節性インフルエンザの再流行に備えて、集団の免疫力をある程度維持するためにはインフルエンザワクチン接種がより重要になる一方で、ワクチン株の選定が難しくなっている。

Dr. Linfa Wang (Duke-NUS Medi-

cal School, Singapore)からはSARS-CoV-2の起源に関する講演「Origin of SARS-CoV-2 (focusing on the science)」があり、いくつかの疑問とその回答について解説があった。

Q : SARS-CoV-2は人工的に合成されたウイルスなのか？

A : 現存するウイルスを改変することは技術的に可能だが、Noと答えるのに十分な根拠がある<sup>1)2)</sup>。これまでに同定されたSARS-CoV-2に最も近縁なコウモリウイルスRaTG13はSARS-CoV-2と塩基配列の相同性が96%であり、全配列のうち1,200塩基が異なっている。したがって、RaTG13からSARS-CoV-2を合成できる確率は4<sup>1200</sup>分の1となり、SARS-CoV-2が人工的に合成され実験室から漏れ出した可能性はきわめて低い。

Q : 2019年12月の発生から1年以上経ってからSARS-CoV-2の起源を探すのは遅すぎるか？

A : 遅くはない。アジアに存在するRaTG13よりさらに近縁の未知のコウモリウイルスがSARS-CoV-2の起源